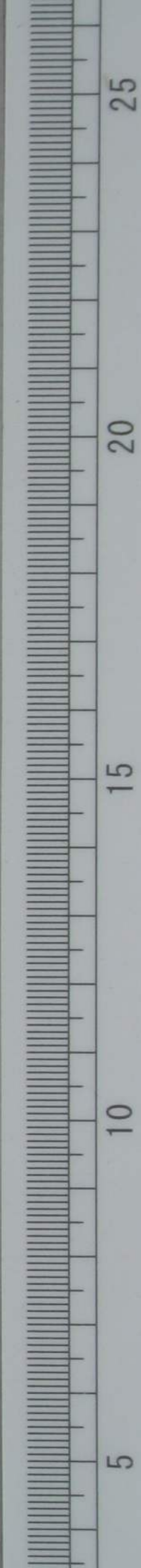
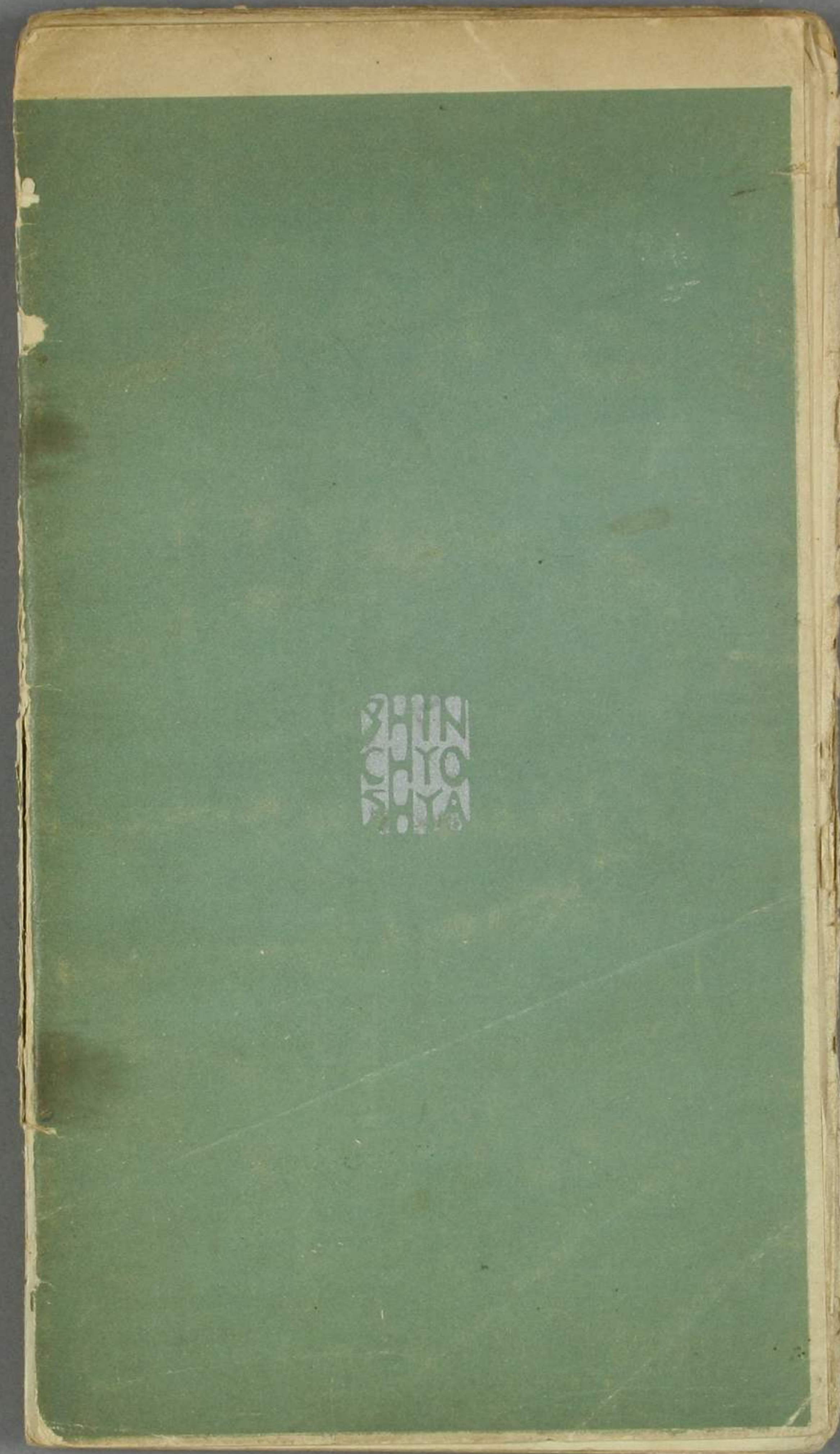


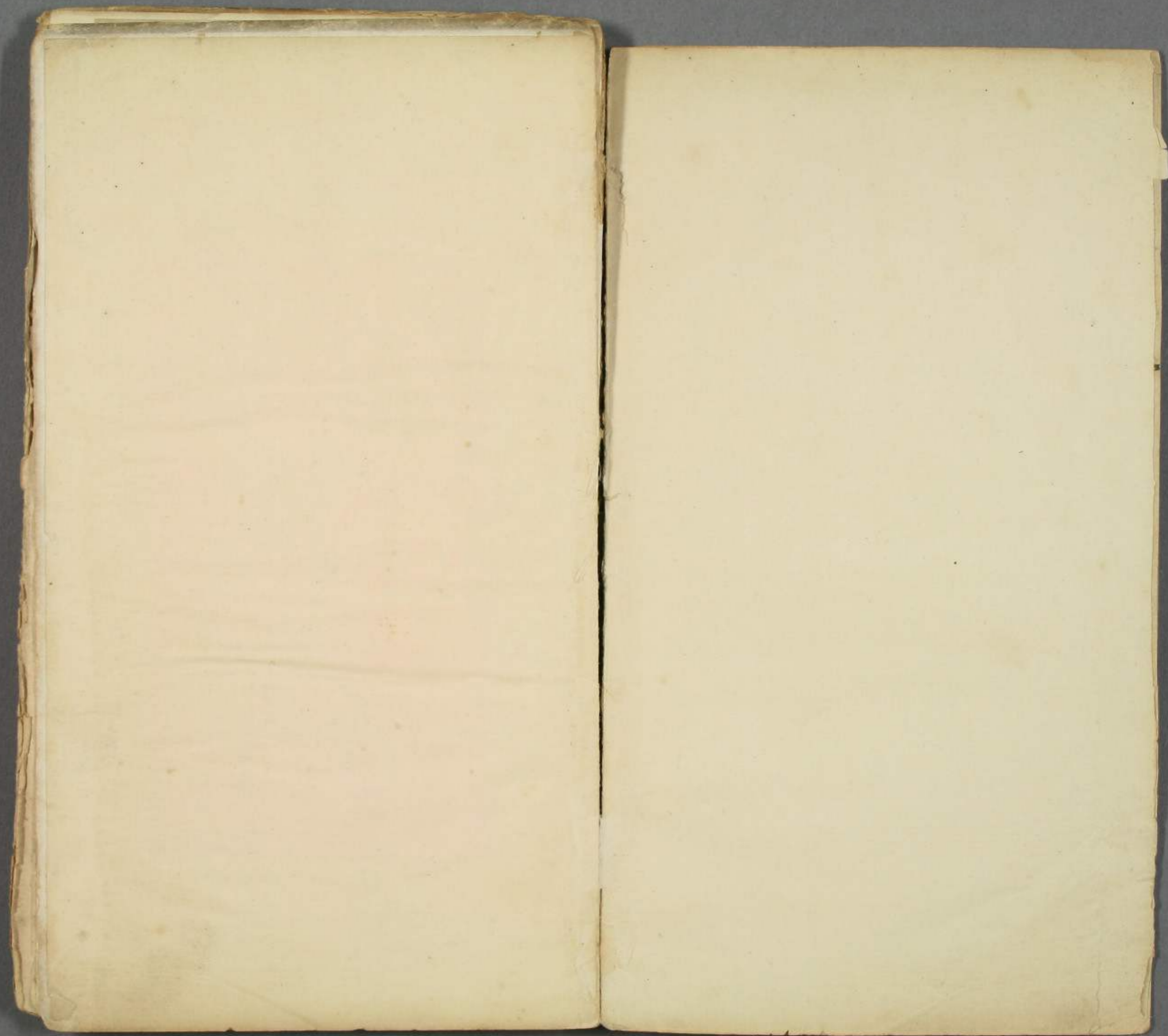
銀鈴

尾上柴舟著









銀鈴

尾上柴舟著



銀
鈴

尾上柴舟著



光逐ひてまよふわが靈みどり葉の
榮はよはいづこにあこがれしむる

森の歌のたけきに

ひとりほゝあまれて



榮

舟

目次

影

小さき木の芽 鷹の羽 森の老樹

野の歌

汝が舞踏 天の扉 波の捲藍

凌霄花

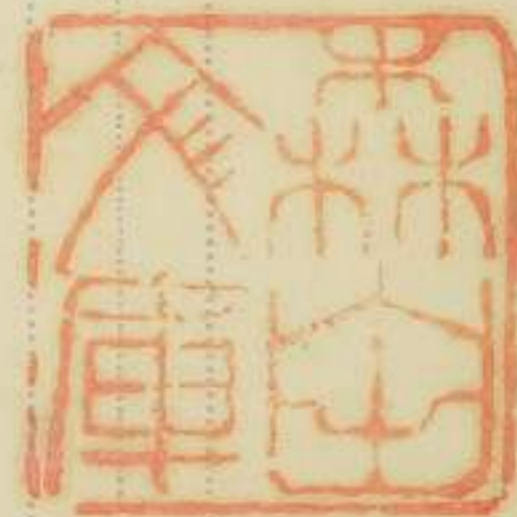
西に入る日 時のそだてし あしたゆふべ

夢

君がちもて 野邊の小鳥 人のこの世

玉芙蓉

往くべきもの 石にな帰れそ すぐれて清き



一

八

一〇

一六

一八

二四

二六

三二

三四

四二

小さき堡

わが窓ちかく 時の徒 清き光

天壇

君新しき 過ありて 君が園なる

楯

もとの濱邊 歌の閑生 平和の村

静寂

ゆふべの雲 眠の海 波も白帆も

玉床

夕雲西に さまびしき野邊 ひとみに勝ちて

昔男

夕雲西に さまびしき野邊 ひとみに勝ちて

四四

五〇

五二

六〇

六二

六八

七二

七五

七八

八〇

八九



銀鈴

影

尾上柴舟著

。今の世は來む世の影か影ならば歌は
その日の豫言ならまし

君がかたへ	九一
井雲	九五
孤獨	九八
稀世	一〇一
旅にて	一〇三
運命	一〇四
幼兒の死に	一〇五
海城	一〇九



たとふれば鷺に逐はるゝ羊の子隠れ
む洞もなき身ならずや

人知れぬさとしありとの此夜をる光
ことなる彼の二つ星

よき友を野邊の何處に求むべき見る
と見る草みな苔あり



朝の氣のみなぎり若き蓬の戸羊の鈴
のうたのせてくる

雪の羽に波のひかりをゆるがして白
鳥めぐる白楊の島

。 小 さ き 火 も 投 ぐ る 光 は は る か な り 破
ら であ ら む わ が 歌 の 反 古

はてもなきわが世は沙漠オアシスに
急ぐ駱駝はたのむ心あり

ともすれば波にまぎるゝ小さき帆の
ゆくへに似たるわが希望のぞみかな

夜ごと逢はむ夢のところや此處なら
し君と手分つ菩提樹のかげ

星のかげ少女のゑまひたゞかくて人
のこのよは寂しくもあらず

ひろこりてやがて消えゆく波の輪に
よく似たらずや人の世は名は

小雀かあらず大野の荒鷺のつばさ折
られし君がわづらひ

老杉の夢にかたらくわが思ふ君が
とならむ日やいつ

連れてこし羊を森に見うしなひて立
てば楡の香身に迫り来る

耳たつる木かげのすだま忘れては思
ふ人の名呼ばむとはせし

鳥あらず舟の帆あらず波あらずまこ
と縁はしづかなる色

智慧の傲り歌の傲りに人の子の眞まこと理
つかまむ手は老いにけり

吹く風に何のさゝやき聞くらむか木
の葉の耳は皆そばだちぬ

小さき木の芽

小さき木の芽の生ひたゞば
何とかなると問ひますな
冠の箱はすくなく
柩は多き世ならずや

鷹の羽

鷹の羽^は矧ぎし白征矢と
現在^はは過ぎけり夢の間に

未來はゆるく這ひよれど
過去は動かすところしへに

森の老樹

森の老樹の根にふるゝ
斧の手しばしとよめませ
君におもひを運びつる
その實をかれは與へにし

野の歌

野の歌にまた新しき朝は明けぬ何の
ひよきかわが世は閉づる

天の糧に飢ゑたるこゝろ満ちむとき
とはの光を得むかわが歌

瑠璃の戸の瑠璃の泉に柔毛そゝぎう
るはしきかな神の小羊

山椿落ちて輪つくる青淵にながれて
はよる薄紅櫻

地にしては花野の小鳥君がうたちひ
さなるもの皆美しき

偽の征矢を避くべき洞しあらば谷の
小鹿よ汝とまじらはむ

暗にのみ退くわが身か御光にあゆめ
の聲のとほくなりぬる

さとおとす鷺の羽風にアルペンの巖
が根小草花みなゆらぐ

御裾に觸れむの指はしびれたり罪の
子とはに罪にあれとや

うつくしき理想の國を夢に得て歌に
よするよはかなき恋まひ

いかならむ花をふくみて野の小鳩汝
が柔胸の傷は癒し

角笛に夜の常闇はやぶれたりさめよ
わが靈いま審判の日

。聲たかし夜半のさゝやき聲たかし夢驚か
す神もこそあれ(詩集さゝやきの序に)

。夢おほき野邊のわか草わか草のわか
きに似たる人のおもひや(詩集のはじめに)

妻戀の歌はよひ寢に忘れしや霧ふる
あさを音にたてぬ鳥

夜の霜は被衣とかへて秋の神寵兒し
ら菊榮あらしめよ(白菊會に寄す)



汝が舞踏

汝が舞踏のとろきに
たゞわが胸は許せかし
魔よ梟よ精靈よ
世は汝が時となりけり

天の扉

天の扉に鑄らむには
あまり短かし君が歌

地に大なるそれすらも
天には小さきものなれば

波の搖籃

波の搖籃とく馴れて
われはや海の子となりぬ
静けき夜半の月かげに
黄金の岸を夢みつゝ

凌霄花

一丈の凌霄花はなひけば晝のあめ降
る白樫の森

楡のかをり袖うつ森のかゞやきにし
ばしは潜む夜と死との影

しるがねの楯射る日影青うなりぬそ
ぞろ駒やる初夏の森

森の精湖の女神とかたらふや今宵夕
月波にあとなき

朝の日をかゞやかしめよ照らしめよ
すだま夜を呼ぶ森の下蔭

杜宇なく音はえある此の朝よわがと
れる手は歌人の御手

夕月の蔭にくまある寺の廊過ぎし白
衣に音はなかりし

流れ來し島の椰子の葉椰子の葉に血
の氣け覺ゆる風吹きわたる

○ 江の水にもし平和やまのかげあらばそこ
にとまらむ流れ藻の花

わが棹に今日も擾さわすよ湖の水にさや
けき戀人の城

獨立ちて今日の一日も思ひあへず何
のさゝやき野の名なし水

ともすればわが日わが友よびかへす
谷間の水の響若しな

いつの世の天女の乳のしたゝりぞ千
年とせ靈ある森かげの水

静けさに堪へぬばかりの身となりぬ
森の木の実よとく土を打て

椰子の露雨とこぼるゝ朝の森沙にあ
る跡獅子にはあらぬか

しづやかにその水そゝげ母が手にかへれる稚兒の
頬ほ濕しさむむ (母なくなりて後程もなくうせし子の墓にて)

うらわかき驕うつくししるがねの楯
にしるせる小さきその名

西に入る日

西に入る日もあけたゝば
また東ひんがしにあらはれむ
泣くな我妹子わが歌に
こもる生命のなからめや

時のそだてし

時のそだてし罪の子を
時はふたゝび葬りぬ

新なるべき日のかげに
清らけきもの生まむとて

あしたゆふべ

あしたゆふべの逍遙に
歌もやあると問ふな君
その野の水と胸に湧く
愁を友のわれなれば

夢

君が吹く夢の小笛とさゝらぎて枕に
よりく島のさ波の

うるはしき夢をいだきて相寄るや君
がすむ家ヤのまどの花蔦

あけぼの、光まばゆき金獅像祖國の
劍の歌はこれより

相逢スや若葉露もつ森のかげ駒鳥ゆ
めの春をよび来る

雀の子とると攀ぢにし軒瓦蛇ともな
らで人は生ひにし

○ 夢とほき理想おもひの島のしろがねの岸を
めぐりて來しか秋風

野に立たす朱衣の王者よみそなはせ
わが誦す歌にさく花あらむ

うつくしき神話とあけし森のあさを
雌雄の小鹿の花ふくみくる

○ 招せむになど偉なるもの許さむや地つち
はとこしへ天とはならぬ

秋の神の黄金の鞭の地つちにふれてその
夜野山はみな色づきぬ

うら若きみどりをすべる朝露にかを
りしめれる背戸の花けし粟いし

海こえてふくか秋風高潮のたかきひ
びきと我琴の鳴る

光の母望の姉の手はなれて生のゆり
床このころつらき

冷たさをいだきて寝なむ時はいつぞ
地の靈いまだ我と親しまぬ

炎の海燃えて走らぬわが舟の舷くだ
くあゝなにの魚

牧童の讃歌めぐらふ野べの森小星聖
者の瞳に似たり

君がおもて

君がおもてや冷たきと
君がたまひし白絹に
そとつゝみても葬りぬ
涙にぬれしわが花輪

野邊の小鳥

野邊の小鳥にそと聞けば
夢より歌はなりぬてふ

罪のかげのみおこるなる
あゝわが夢をいかにせむ

人のこの世

人のこの世にたぐひなき
君が御業の尊さよ
日は行き年はかへれども
盗ます老も習慣も

玉芙蓉

明日ふまむかの大岳の朝の雲うた人
われに幸あらしめよ

ともすればつまづく駒に鞭うちてよ
ざる大野の雨眞白なり

知るしらぬ肩うちあはせ膝磨れば藁
沓枕つめたくもあらず

燃えて消え消えて燃えたつゝるり火
に集ひよる人たゞ鬼のこと

岩かげに吹きつけられて山風の過ぐ
る待つ間はわれ我にあらず

鞭あげて山の御神や下ります甲の裾
野に雲なだれ落つ

布きみてる雲のたえ間にそばだつや
彼れ甲の山彼れ信の山

低き山よ小さき湖うみよせまき國よわれ
こゝに立つわれこゝに立つ

山の鬼枕にせまる眞夜中を五百つ磐むら
風なりとよむ(以上九首癸卯夏)

朝霧のなごり草縫ふ麓野や額にせま
る富士のおほ岳

仰ぎ見る目さへしひよと朝空のたか
きに傲る富士の神山

。亂れては雲と走らふ山の石一つ一つ
に靈あるがごと

。指させばたゞ掌たなごてにかくれけり小さく
もあるかわが住める國

雲とぬる高嶺磐床夜をさむみ地ちに落
ちたり人の子の夢

。雲はみな谷に沈みぬ月は出でぬさめ
よわが歌世はいま太古

。太神の御夢のひまを山めぐる風の使
のうたもなき夜や

。聖まき手やわれを導く雪をふむ暗の岨
道あやふくもあらず

紫に夜の明け行けばしろがねの光た
だよふ三日月の湖

何となく慄く足もおのづから神にち
かづくわが身ならずや

足もとにひれおす千山五百つ山みな
わが歌に待つあるが如し

山もふしぬ海もよりきぬ古の王者の
おこり今胸に満つ

ふみわたる千年白雪聲もなし翼あら
ずや人の子われも

狂ひたつ雲のおそれやをのゝきやあゝあ
あわれはつひに人の子(以上十四首甲辰夏)

。往くべきもの

往くべきものを往かしめよ
運命を人はいかせむ
地におちゆく檜の實は
神も梢にかへしえじ

石にな鑑りそ

石にな鑑りそ君が歌
石はかくべし崩るべし

たゞ木に彫れよ木とともに
歌も大きくなりぬべし

。すぐれて清き

すぐれて清き星二つ
落ちて瞳となりけむ
君がまなざし見つむれば
天のまこともしらるゝよ



小 さ き 堡

小 さ な る 歌 の 堡 に 世 と 戦 ふ た し か ひ の 人
わ れ あ ら た な り (以 下 二 首 年 の は じ め に)

思 々 し と 云 ふ な 歌 は こ れ よ り わ が 胸
の 傷 よ こ の 年 た し 深 う な れ

劍 に よ り て 東 亞 生 き た り 歌 に よ り て
光 放 た む 時 は そ も い つ

東 ^{いんぎし} に こ の 人 あ り と わ れ あ り と 世 の 歌
史 ^{あき} に 書 か れ な ば 足 る

く だ け や す き も の よ り な れ る 大 地 ^{ちがほ} や
歌 人 わ れ と 書 く に す べ よ し

魔のゑまひうつる硯に筆ひたし夜中
わが書く世を呪ふ歌

天地はわれにつれなしつれなくてわ
が世榮はありわが世力あり

あやまりて影を趁ひつゝ走りけりかしら頭
ふみても立つべかりしを

めぐれく大地めぐれとくめぐれ傲
らふ人をとく墓に逐へ

短夜を耳にはなれぬ蚊の聲のほそく
ちさきに似ずや汝なが歌

道行くに狭しと云ふな強き手にたゞ
おしひらけ汝なは大丈ち夫を

やめよやめよ高き調は世にあはず低
からざるは汝が病なり

ほとゝぎす若葉になきて雨になきて
夜毎いざなふ人戀ふる歌

夜七夜光を戀ひて血を戀ひて泣かば
わが歌靈こもるべき

白隼は雲に入りけり草におちてうさ
かぬ鳩はたれならなくに

譽ありて男の子は動き燭ありて夏の
羽蟲はみなつとひよる

わが窓ちかく

わが窓ちかくよりきつゝ
いくたび汝きみは聞きつらむ
夕べとなればわが歌ふ
歌のしらべを夕づつよ

時の使

時の使はいそがしく
今君が戸を叩きたり

さめよさめませさめざらば
ながき眠に君おちよ

清き光

清き光を鞭として
まねけば動く星の群
あゝ月よ君君こそは
天の廣野の牧童ひつしかい

天壇

聖の子がいのりさゝぐる天壇と夏雲
めぐる朝の妙香

黒姫のまた寝の夢をゆるがすや朝戸
隠かくしの戸を出でし雲

雲落ちたり森の花草さとゆれて風よ
天使のいま過ぐるごと

黒姫の暗の裳裾の香をしたひ鬼戸隠
のゆめによる夜や

高き枝えに高き花咲け名もしらぬ木か
げ小草のわれいかにせむ

譽とはあゝたゞ一つ墳墓むらぶのうへにそ
びゆる黄金塔あうごんた

。瑠璃鳥の夢呼び過ぎし森かげやしめ
り覺ゆるしるがねの笛

。寂しさのそれも光よこれありて人瞑
想の興に入りぬる

大地の底のおもひを枝にこめて高き
うめきのかのおほ柏

荒びたつ生命いのちの海の小さき島とよれ
ばそよめく森の花草

釣床やハイネに結ぶよき夢を小さき
葉守の神よのぞくな

底しらぬ思想の湖の水えむに樋の戸
ひらかむ手力のなき

手習へば軒の葡萄のさゆらぎに夏の
日あをし桂萬葉

瞑想の堂のきざはし一歩一歩のぼる
登音とわが歌はなる

半暗半光の曉の野に過ぎしわが世の
おもかげ見つる

黙禱のあさ戸あくれば妙香のたかね
しら雲眉にせまり來

すべりたる詩集拾ふと釣床を下るゝ
あやふき髪ながき人

歌に倦みてよるにも
のうき山の窓秋
の日さしぬ竹より西に

即興に歌はならじとほこりほこり雨
の芙蓉に灯ひをよせて見る

月なきに興ありがほの人五人窓の芭
蕉にうた書きすさぶ

紅芙蓉露にかもたき竹の様歌なき人
に月もをぐらき

筆そめむ露は芙蓉の紅ようたによる
しきしら萩の雨(以上四首月令會席上)



君新しき

君新しき楫とらば
光ある日はあけぬべし
希望の海ははてもなく
君がゆくてに開くべし

過ありて

過ありて人は生き
恐怖おこりて人は醒む

神の御鞭のやすむとき
傲と名とは世に出でぬ

君が園なる

君が園なる小狐の
小さき智慧はもたねども
思ひにあまる朝夕の
歌はしのびぬ君が窓

楯

楯とりて祖先の靈も野に出でよ劍に
つよき子はいま起てり

小さきに馴れ弱きに馴れて世のうた
人世に戦の詩たるを知らず

死すべくばいくさの大野生くべくは
光満ちたるかの愛の國

小さき平和説きしは誰れぞ誰れぞ誰
れぞ再び説かむ子あらば刺さむ

いくばくの眞理まこと小さき書かきにこもる丈
夫たゞ誦せ戦の歌

楊花飛ぶ春鴨あひ緑ろくの朝づつみ砲車ねぶ
れる獅子にも似たり

銃ずの音は闇にまぎれし森のかげ一騎
歸らず月落ちむとす

蒲はを巻きて砲車こゑなき九里島楊柳やなぎ
の夜露雨ふるがごとし

斥候の銃火絶えたるしばらくを眞夏
黍原風だにもあらず

吸筒の水かたぶくる野の夕べ敵あてのな
さりの笑あはうつくしき

壁間のわが名わが歌古りたりや十年
また入る金州の城

奪ひえしヨサクの槍のきらめきに斥
候の夏の夜は明けにけり

破れたる軍旗に榮ゆる紅やあゝ大丈夫
夫はかくして死なむ

軍の神黄金の楯を野に投げて大丈夫
君を守らせたまへ

姉は明後日弟は明日の夜は更けて旅
順の夢に二人は入りぬ

もとの濱邊

もとの濱邊にさすらひの
その一年をとふな君
望は波の中にして
涙は沙の上にあし

歌の園生

歌の園生にそと入りて
花に生命をあたへゆく

まことあるもの世にはたゞ
憂とばかり名づけたり

平和の村

平和の村の朝夕を
今日わが前に説きますな
うらぶれ出でて年を経る
わが故郷のそれなれば

静寂

楠の香のしめりにたぐふ憂あらむ森
の夕べに立ちますな君

とよめきて問過ぎたる胸の野やたの
しき鳥と眠は來ぬる

静寂の君夢の女神とあひましゝその
夜生れ出でし愛の子や夜

鐘のおとも吹き散らされて地に落つ
るあらし冷たし人の世の秋

瑠璃の露にてりし眸を夢におひてま
たかへり來し葡萄おほき村

恐ろしき夢よりつく鐘のおとに暗
に傲りの影ふと消えぬ

日は入りて潮たゞ青き西の海や片帆
あげたる君が舟行く

花束の雨にうたれて歌の都歌の大路
を君と行かむかな

菩提樹のかげゆたかなる故郷の牧場
の道をけふもゆめみつ

悲愁^{かなしみ}は堂の大鐘綱ひきて高う鳴らせ
ばまたたかう鳴る

われこそは森の歌人市の堂に出でて
うたはむ譜はまたもたぬ

王冠の眞玉のひかり強けれど谷の聖
者にさすはいまだし



玉床

君こそは徳の大おほ褒ほ詩の大おほ褒ほくだけこ
とごと今胸に入れ

あはれみの御眉弱しあゝかくて歌に
迷はむわれらふたゝび

文の冠歌の冠のさだめにと今宵とよ
まむかの天つ國

おん胸にふたゝび湧かむ歌やあると
寒き夜すがら御柩守る

翼生ひよわがよむ歌に翼生ひよ天ゆ
く君にとく追ひ及かむ

御叱の聲に過ぐし、九年あゝ九年ま
たかへりなば

子の秀才すさい孫うまごの秀才すさい高う呼べ歌の御祖おや
はたゞ眠ります

世はなべて歌の眞玉に満ちむとき師の御
眠やけだしさむべき(以上八首萩の家先生の御柩の前にて)

ゆふべの雲

ゆふべの雲を説きますな
夜半の嵐を説きますな
たゞたゞ君よ出でて聞け
さとしは朝の濤にあり

眠の海

眠の海にかこまるゝ
生命の島の少さきや

時の潮のよるまゝに
隠れてぞゆくたゞ暗に

波も白帆も

波も白帆も水鳥も
夕べの色は奪ひたり
うばひし愛のかたみぞと
過去の残しゝそれなるを

昔男

大倭ふたゝび揺る戀ありやむかし男
の天の香具山

杉のひまにあふるゝ角よ愛しき眼よ
奈良の春日はたゞ鹿の國

ほのぐらき大講堂の石だたみふめば
たふとしわが楚音も

青柳の花ひるがへす風よわみ奈良の
大路は雨塵のこと

陵の松による鶯こゝろありや佐紀の
おほ池雨こまかなり

神の世の夕日を浴びて菜の花のかを
りの中に立つはたゞわれ

大比叡の峯の霞もながらふや八瀬の
青淵花ふゞきする

繪日傘の夕日につゞく四條橋昨日の
歌のぬしはいづれぞ

一隊の龍騎のかげは遠くなりて夕露
まよふ楡の小林

暮れて行く春の雨夜を老武者の鎧つ
くろふかゞり火のまへ

草に寝て晝の雲みる裏山の松にきて
鳴け山ほととぎす

繪たくみを友にえしより朝夕の雲わ
が歌にふさはすなりぬ

穂薄におぼめく秋を鹿よなけ草山月
夜あまりさびしき

幢旛の夕日ゆすりて山寺の孟蘭盆過
ぎを吹くよ秋風

秋風になびきて寄らむ君が袖とひと
りして見る小庭白萩

天平のかをりつめたる袖にしめて秘
佛をかむや秋法華堂

朝の日に黄金細蕊香を吐きて秋に傲
りの木犀のはな

木犀のあまきかをりに詩は成りて晝
あたゝけし草堂の秋

さびしさに笑まむはあまり執せりと
秋海棠は頭かしら低れたる

秋の日の眞紅とりては集めてはわれ
と領する雁か來り紅かの花

ひとり倚る巖いわの冷ひやに瘖せ瘖せてわれ
によく似る草の名は蘭

辛うじて氷のくさび脱れえし今宵甲よろ
板きの雨あたゝけき(氷と甲板とを結びて)

獲物なくて歸るにかろき瘖肩の兔の網に
散る春のゆき(網と雪とを)

厚氷棹にくだきてこの川を東にこさば汝
が事成らむ(棹と氷とを)

酒は麥酒木はリンデンの人の國醫師は君
といはれて來ませ(獨逸に留學する醫學士の君に)

聲低くうたふむかしのわが歌に心の
いたみ生きかへるかな

夕雲西に

夕雲西に湧きたてば
あゝまた涙したゝるよ
我世の旅は長うして
休の谷の遠ければ

さびしき野邊

さびしき野邊のおとこるに
たゞひとりとなわびそ君

君がみ歌を習ふべく
とひよる鳥もあるものを
きそひに勝ちて
きそひに勝ちて
木陰の武士のをしさを
楯の光を奪ふべく
魔よこの宵は許せかし

君がかたへ

(四行の一節を短歌二首の形に譯せる)

われはしも君をぞおもふ
うるはしき五月さつきの朝の
日かげ見れば
われはしも君をぞおもふ
うるはしきみ空の星の

ひかりあふげば

われはしも君を氣遣ふ

さだめなき山のみ空に

雷かみはためげば

われにしも君はほのめく

ほのぐらき森の木葉に

風のそよげば

われはしも君が聲きく

夕やけの色こき雲に

雲雀うたへば

われはしも君をぞしのぶ

漲れる池のおもてに

小舟まよへば

君とわれと今たゞ一つ

死といふもなか奪はむ
この樂しさを

あはれ君われに呼ばしめ

君こそはわが世の光

胸のひかりと

片雲

永久の霜を帯びつゝ、咲き匂ふ花よ、汝等、
鷺の巢のあたり繞りて、戯れ飛ぶ山羊よ、汝等、
恐しき山の嵐と睦びあふ鷺よ、汝等、
雲の射る恐しき征矢、電、汝等、
物の記號、物の奇迹よ、汝等、汝等、
千早ぶる神を叫べよ、賞賛もて岡を滿せよ。

ほのじろき山又汝は、天そゝる頂もちて、
ともすれば、其中腹より、音もなく落ちくる雪崩、
汝が胸をさしおほひたる白雲の深きが中に、
射るが如流れて下る。朗らけき日に輝きて。
再も我は云はむ。汝こそは恐しき山。
雲のごと前に立ちつゝ、嚴かに見えわたる山。
麓よりやうやく高く、涙もて塞がる我眼、
擡ぐれば、云ひ知らぬ畏敬の念に、

しばらくは、頭垂れらる、
屹てよ、永久に屹て、怒りたる雲の如くに、
此地より永久に屹て。
岡の上に玉座据ゑたる、嚴しき汝こそは靈。
人の世を天に通ずる、恐しき汝こそは使者。
大なる教の主よ。静やけき御空に告げよ。
星に告げよ。さしのぼる旭日に告げよ。
聲あげて、この大地は、神を稱ふと。

孤獨

幸ある人と君はしも
戀人の手に急ぐらむ
われたゞひとりしかは云へと
われ恵むもの伴へり

そは碧なる大空よ

花にかざれる牧場ぼくじやうよ
千年ふりたる森の夜を
さびしげに啼く鶯よ

そは静なる白雲よ
生けるが如き水の音よ
緑の畑にたつ波よ
かろく飛び交ふ群鳥よ

薔薇^{ばら}なす人の唇に
腕^{かひな}に君が息ふとき
ひとり上衣を夕風に
打ちまとひても我は行く

さまよふ人の影たえて
鳥はねぐらに歸りにし
暗の夜すがら光ある

夢見ながらもわれは行く

稀世

夜なす地下にくだりゆけ
清き疵なきあたひなき
石のかずく見いづべし
しづまりはてし坑^{あな}にして

波かきわけてわたつみの
底の岩かげもとめみよ
まろききよけき眞珠をば
なれたる腕はつかむべし
息ふことなくもろ人の
かよふ衢にたゝずめよ
なれは見いでむよしあらじ

きよき疵なきこゝろをば

旅にて

大海原の眞夜中
舟の火の消えし時
空の星の見えぬ時
海風にまもられて
甲板に火ぞ見ゆる

火のかげに羅針盤
明らかに守るや按針
そを見れば暗つらぬきて
我をひくよ胸に燃ゆる火

運命

運命よわれは汝を知る
世にわが幸はなけれども

詩こそ榮ゆれ夢にして
痛を汝はかくれども
憂にあらで詩をぞあたふる

幼児の死に

軽らけき足跡をつけつゝ
汝は來ぬ汝はかへりぬ
いそがしき地の客人

何處どこより汝なは來りし
何處どこにか汝なはかへりし
神の手を一度ひとたびはなれ
神の手にまた歸りきと
今ぞわが知る

海城

海岸うみぎしちかく聳えたる

いかめしき城見しや君
黄金の色に紅に
雲こそうかべその上に

鏡とすめる水のおもに
かげこそうつせさやかにも
紅燃ゆる夕雲に
飛びこそ翔れをしくも

「われは見たりきその城を
海岸^{かき}ちかきその城を
月はかゝれりうるはしく
霧はめぐれりいかめしく

「わたの波風おもしらく
たのしき聲にひゞきしか
君は聞きつや高殿の

上にしらぶる樂の聲

「波のさわぎも風の音も
ひゞき絶えたる一時に
目^め睫^{まげ}にあまる涙もて
われは聞きたり泣く聲を

「君見つらむか塔の上に

立てる君主をも后をも
深紅なみ立つ上衣をも
黄金きらめく冠をも

「喜ばしげにともなひし
愛しき少女を見ざりしか
黄金の髪のかきらめきに
天つ日のごといつくしき

われは冠の光なき
み親二人の君ぞ見し
身にかなしみの衣つけて
傍に少女はもたざりし

明治三十七年十一月七日印刷
明治三十七年十一月十日發行

定價金貳拾五錢

不許
複製

發行所

牛込區新小川町
一丁目十三番地

新潮社

著作者

尾上八郎

發行者

中根駒十郎

印刷者

山口竹二郎

印刷所

會社
資東京國文社
京橋區宗十郎町十五番地

文學新 潮

第七號 十一月十日刊

每月一回十日發行
定價拾貳錢郵稅一錢
六冊郵稅共七拾貳錢
郵券代用一割増の事

▲『新潮』は、伊藤銀月、田口掬汀、金子薫園、松居松葉、佐藤紅絲、登阪北嶺、佐藤橘香の諸氏主として筆を執らるゝ文學雜誌なり。

▲『新潮』の掲ぐる所は、熱烈奔放、直論諱ひなき評論及び人物月旦、情趣饒かなる小説、美文、韻文。奇警人の意表に出づる雜錄等也。

▲『新潮』は紙面の大半を開放して青年文士の馳騁に任す、評論、小説、美文皆可也、和歌亦最も歡迎する所也、乞ふ奮うて寄稿あれ。

▲『新潮』の短歌は、新派歌壇の雄鎮金子薫園子選評に當られ、現時韻文界の一勢力たらんとす。『銀鈴』の著者又毎號新作を寄せらる。

十一月十日發行新潮流第七號要目

◎東西人の死生觀(評論)	山縣五十雄
◎坐り芝居(同)	松居松葉
◎天才と常才の小説(同)	田口掬汀
◎小杉天外を難ず(同)	登阪北嶺
◎甘言苦語(同)	社中同人
◎無名の狂人(人物月旦)	伊藤桃太郎
◎奇乎貌(小説)	天馬風葉
◎美乎鏡(短歌)	小栗秋聲
◎星光(同)	尾田柴舟
◎大鐘(同)	金子上園
◎黙想(同)	金子薫園
◎關西の劇壇(雜錄)	奥村薫泉
◎ヨタラウ漫言(同)	菊坡大隱

(此外評論、小説、美文、韻文數十篇あり)
新潮一號、四號、五號、六號賣切。二、三號僅に少數あるのみ也

和歌作法

金子薰園君著
——近刊——

東京府立第一女子高等學校

